

1 国 語 科

羽場邦子・岩本和貴・谷 栄次

1 国語科における「自立」の基本的な考え方

本校では、国語科において「子どもが自立する」ということを次のようにとらえる。

ことばを媒体とした主体的な言語活動（読むこと・聞くこと・話すこと・書くこと）を通して、ものの見方・考え方・感じ方をより確かに、より豊かにしていき、自分を見つめ常に向上していく力を身につけること。

一人ひとりが自立に向かうためには、自ら学習すべき課題を見つけ、課題解決のための方法を考え、追究するなど、「自分の力で学ぶ」ことを重視しなければならない。

しかしもう一方で、教室は集団活動の場であり、授業では常に人と人とのかかわりが伴ってくる。そこでは、お互いの考えや感じたことが触れあうことで、一人ひとりの学習意欲が刺激されたり、ものの見方が広がったり、考え方に新たな視点が加わったりするなどの「学び合い」が生まれる。こういった「学び合い」を通して、さらに「自分の力で学ぶ」ことをより確かなものにしていき、一人ひとりの「学び」の質的向上を図っていきたい。

2 サブテーマ「自分で決める場を大切に」とのかかわり

一人ひとりの自立をめざして、課題を自分の力で追究する学習を成立させていくためには、「自分で決める場」をどう保障していくかが大切になってくる。

「自分で決める場」を広い意味でとらえると、教材文を音読するときの「こんなふうに読もう」や話し合いのときの「こうだからこう思う」など様々な学習活動の中にあると考えられる。自分の思いをことばで表現するとき、そこには「自分の考えを決める」「その根拠を決める」「ことばを選ぶ」「ここで発表しよう」などの自分で決めることが絶えず必要となる。「自分で決める場」は、何かを決定するその場だけを示すものではなく、そこまでに至った考える過程を重視しなければならない。

これまで本校では、子どもたちが優れた認識主体（ものの見方・考え方・感じ方の主体）として自立することをめざして、課題解決的な学習に取り組んできた。学習展開に沿って、どんな決める場が考えられるのかを次にまとめる。

学習課題をもつ段階

●学ぶ価値のある課題を決める。

（興味・関心・意欲に根ざした課題，必然性を伴う課題など）

課題解決のための計画をたてる段階

●課題解決の方法を決める。

課題解決（追究）の段階

●課題に対する自分なりの考えをもつ。

●自分の考えのまとめ方（表現の仕方）を決める。

●相互交流により考えをさらに広げたり深めたりする。

ふりかえりの段階

●観点を決めて、自己評価を行う。

3 「自立に向かう子どもたち」を育成する授業の具現化

(1) 課題解決的な学習展開の重視

本校では、課題解決的な学習を柱とした学習のステップを構築してきた（平成9年度研究紀要参照）。これまでの取り組みから、学習のステップと学習活動、教師の支援についてまとめると次のようになる。

学習ステップ	学 習 活 動	支 援 活 動
①話題・課題 教材と出会う	<ul style="list-style-type: none"> ・主体的な出会いと課題の発見 ・学習目標の意識化 	<ul style="list-style-type: none"> ・実態把握 ・学習への期待，主体的な学習の構えづくり
②見通す	<ul style="list-style-type: none"> ・課題の意識化 	<ul style="list-style-type: none"> ・学ぶ価値のある課題づくり（興味・関心・意欲を生かした，必然性を伴うなど）
③課題を解決 （追究）する	<ul style="list-style-type: none"> ・学習内容，方法のイメージ化 ・見通しを生かした自主的な学習理解領域（考える→話し合う→まとめる） ・表現領域（考える→表現する→見直す） 	<ul style="list-style-type: none"> ・手引きなどを利用した計画づくり ・個と集団を関連させた展開の重視（話し合いの焦点化，成果の明確化） ・学習記録の重視
④ふりかえる	<ul style="list-style-type: none"> ・学習の成果の自覚 ・内容，方法にかかわる自己評価 	<ul style="list-style-type: none"> ・評価の観点の明確化 ・肯定的評価と次の課題の把握

子どもの実態や教材の特性に照らし合わせて、学習のステップを進めていくことが重要になってくる。子どもたちに育てたい力は何か、それをどのような活動を取り入れてねらっていくのかを明確にした上で、学習過程が工夫されてよいと考える。

(2) 発達段階を考慮した指導・支援

学習を主体的なものにしていくためには、課題が子どもの「解きたい」という内なる要求から生まれたもの、単元や教材の本質にせまる価値あるものにならなければならない。教師は、課題の質を見極め、問いかけなどによる積極的な働きかけを行う必要がある。つまり、子どもの問いを育て、追究への見通しをもたせるなどの教師の支援とともに、子どもの主体的な学習が成り立っていると考える。

発達段階を考慮して、課題解決的な学習におけるめざす子ども像を次のように考えている。

	← 自分の力で学ぶ	教師の指導・支援 →
	(めざす子ども像)	
低学年	・教師の働きかけを生かしながら，課題解決的な学習に取り組む。	
中学年	・自分なりの疑問や気づきを大切に，課題解決的な学習に向かう。	
高学年	・自分たちの力で見通しをもち，課題解決的な学習をめざす。	

4 成果と課題

(1) 国語科としてのふりかえりと進むべき方向性

本校では、4年間にわたって課題解決的な学習を中心とした取り組みを行ってきた。子どもたちの自分で学ぼうとする姿勢、自分で学ぶ力は育ってきたと感じる。学習に対し主体的に取り組もうとする意欲や、「学習課題」に対する意識が高まり、自分の考えを大切にできるようになってきた。

課題もいくつか挙げられる。「学習課題」は意識していても、解決する方法を適切に選択したり、設定したりすることができにくい。また、解決した問題を、他者の意見と相互交流することにより、更に広げたり深めたりする力が不十分である。

それらの課題を克服するために、本校国語科の設定していた学習ステップに沿って、見直しを行った。その結果、課題設定における教師の支援のあり方はこれでよいのかということと、ふりかえりによって、確実に「学習課題」を評価し、次の学習に生かしていくことができているのか、という2点が反省として挙げられた。課題設定とふりかえりは強く連動するものであり、確かなふりかえりが、「学習課題」の質を向上させるものである。その結果、話し合いによる意見の相互交流も活性化され、自分の立場や考えも明確になるのではないかと考える。

また、課題解決の方法について、様々な学習手段を低学年から経験し、理解を深めることで、いつでも自分の学習法として、見直しをもって活用できるようにしておく必要がある。

(2) それぞれの学年における具体的なふりかえり

低学年の子どもは、教師の働きかけを理解することはできるようになってきた。課題解決的な学習も何度か経験し、「学習課題」を意識しながら学ぶ子どもが増えてきている。だが、教師の支援を生かしながら、課題解決的な学習に取り組むまでには至っておらず、学習の見直しをもって臨んでいるとは言い難い。やはり、学習すごろくなどのワークシートやノートの工夫によって、課題解決の道筋がよく見えるようにする必要がある。こうした「形」や「方法」を、何種類かにわたって繰り返し学習することが、中学年以降の学習形態の選択に幅をもたせることになるかと考える。学習の各ステップで、今何を学んでいるところかを丁寧に確認することも、大切な指導の要素だと考えるようになった。楽しんで課題解決的な学習ができるような取り組みを継続したい。

中学年の子どもは、自分の思いを表現したい、自分たちで考えたい等、学習に対する意欲をもっている。この意欲を大切に学習を進めてきた。子どもたちの作った「学習課題」は、教材を読み進めるには不十分なものもあったが、自分たちで作った「学習課題」を大切にしたいという思いは強かった。そのため、課題解決の過程で、この「学習課題」は適切だったかを検討した。このような時間が「生きた学習」になるのではないかと考える。課題解決では、書き込みプリントに気づきを記述する、自分のノートにまとめるという一人学習を重視した。このような活動の積み重ねにより、自分なりの考えをもつことができるようになったと考える。一人学習での考えを相互交流で広げたり深めたりする場、単元の学習を振り返る場での教師の支援のあり方が今後の課題である。

高学年では、自分たちの力で見直しをもち、課題解決的な学習をめざしてきた。教材の本質に迫る「学習課題」が子どもたちから出されるようになってきた。その際、子どもたち自身が内なる欲求を感じる場の設定の工夫が鍵となる。既習の学習をもとにしたり、教師の言葉かけをきっかけとしながら、どう解決するかを話し合うようにしてきた。自分なりにまとめた考えや学びの成果を表現しても、感想交流や評価し合う場面で、さらに広げたり深めたりすることができにくい新たな課題も発見した。学習活動に対するふりかえり（自己評価）を繰り返すことで、質的な高まりを求めることが何よりも大切になる。